

# 論壇

## デモ隊から有力政治家へ

2002年の年初のダボス会議は米国のニューヨークで開かれた。ダボス会議については新聞やテレビなどで聞いたことがある人も多いだろうが、スイスの山の中の小さな町のダボスで毎年開かれる経済会議である。世界中の政治家や経済人が集まることで注目されている。日本の総理も何度か参加している。

そのダボス会議がニューヨークで開かれたということは異例のことだ。前年の9月11日にニューヨークとワシントンで起きたテロ、いわゆる9・11事件を受けてのことだった。

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

私もこの会議に招待されたが、その時の現地の異様な光景は今でも忘れられない。会場となったワオルドルフアストリアホテルの周りを何万人という反グローバル化を唱える反対派の人たちが取り囲んでいるのだ。その人たちが激しい行動に出ないように、同じくら

## 反グローバル化の変遷

いの人数の警察やガードマンもいる。その反対派の人たちをすり抜けて会場に入っていたことを思い出す。

当時の反グローバル活動は、世界のどこにいても活発だった。経済や政治の会議があると、そこにはグローバル化に反対の人が集

まった。オーストラリアの会議では、会場のホテルの周りを取り囲まれ、ホテルの裏の窓から出ていった会議の参加者もいた。

最近はどうした光景をあまり見なくなった。それだけ反グローバル運動が下火になったのか。それとも町でのデモのような活動では効果がないと活動家が考えるよう

である。あるいは英国のEU(欧州連合)からの離脱を叫ぶ政治家である。

町でグローバル化を叫ぶデモ隊ではなく、世界の政治に影響を及ぼす有力政治家がグローバル化に反対する声を上げるのは、以前よりも反グローバル化の勢いが強くなったとも言える。それに呼応して選挙民がそうした大統領候補を当選させ、英国のEUからの離脱に賛成票を投じるといったことは、グローバル化への反発の声は以前よりも広がっていると考えるべきなのかもしれない。

### 経済痛めつける保護主義

いまさら強調すべきでもないことだが、グローバル化に反対する声は危険な動きである。過去の歴史を見ても、保護主義的な方向に政治が流れた時、その国の経済はろくなことにならない。グローバル化の動きは、時に一部の人たちには暴力的にも映る。そうしたグローバル化の暴力を抑制する政策は必要だろう。ただ、貿易を厳しく制限したり、移民をむやみに排斥したり、外国企業を差別するような行為は、その国の経済を痛めつける結果となる。その意味では、欧米で進む反グローバル化の動きは警戒心を持ってみる必要がある。

幸い、日本はそうした動きにはなっていないようだ。欧州との経済連携協定の締結も近い。海外からの観光客を積極的に受け入れることで経済振興を進めようという地域も多い。こうした動きを大切にしたい。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。